

6. 5 とむらうアンケート抄

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

- ・長いプロセス：通夜、葬式、出棺、埋葬／位牌・仏壇、月命日、彼岸、盆、年忌供養、弔い上げ…
- ・葬送の前近代：コミュニティに支えられた葬式仏教が基調（神葬祭は近代から）
- ・葬送の近現代：高度成長期（葬送の脱コミュニティ化）とバブル期以後（主体と手法の多様化）→「終活」の時代

【葬儀の準備】2022年、河内長野市（大阪）で祖母のお葬式の際、旅支度ということで、わらじをはかせたり、葉っぱを使って口を水で濡らすなど、さまざまな作法を行なった。その意味については葬儀屋からの説明を受けた。よく知らないものが多かったが、死後の世界で祖母が苦しまずに済むように願いを込めたものだった。

【葬儀（青森）】10年ほど前、母方の曾祖母が亡くなった。田舎（青森県の西津軽郡鰺ヶ沢町）であるため、葬式などの一連の法事をセレモニーホールなどで執り行うことは少なく、昔からの習慣で、キッチンが備えつけてある、畳敷き、二重扉のプレハブ小屋で行われた。当時の私は幼かったため、詳細は記憶していないが、港町であるため、鮑をはじめとした海鮮類など、出された食事が美味しかったことを覚えている。その1年後、仙台に住む父方の曾祖母も亡くなり、ベルコという会社で葬式を行ったが、前回ほどの感動がなく、あれは鰺ヶ沢町だったからなのだと驚いた。

【葬儀（岐阜）】2008年、岐阜県不破郡藤下で母の大叔父の葬式が行われた。名古屋の親戚筋で、名古屋の家はしきたりに厳しいという。親戚がすべての世話をするのが慣例で、喪主は葬儀中に動いてはいけない決まりがある、この葬儀の喪主であった娘さんは、額縁が歪んでいたのを直ただけでも怒られたそう。焼香順も厳密に決められており、順番を間違えると縁が切れることもあるという。母は岡山の葬式に参列した際、焼香順が特に決められておらず、皆が自由に焼香していたことに大変驚いたという。同じ葬式でも、地域によって大きく異なることを実感させられた。

【葬儀（滋賀）】父が亡くなり自宅から葬儀場へ移動する時、魂が成仏し、家に帰って来ないようにと、父が使っていたご飯茶碗を玄関を出たところで割るようになれ、兄が父のご飯茶碗を袋に入れ地面に軽く叩きつけて割ってから、霊柩車へ乗り込んだ。また手には手甲を付け、三途の川の渡し賃ということで六文銭を懐に入れてあげた。旅に出るのだなあという気持ちで見送った（滋賀県栗東市、令和2年、浄土宗）。

【葬儀（高知）】2018年に祖父を亡くした。元気だった祖父の突然の訃報にとっても驚き、戸惑った。高知県の風習で、残された人の爪を切って棺桶に入れ、火葬をするというのがあり、みんなで爪を切って入れました。

【四十九日】2024年、長岡京市の親戚の自宅にて曾祖母の四十九日法要が行われた。法要が終わると、おっさんが大きな餅を人の形に切り分けた。傘餅とよばれる風習だという。「笠以外の好きな部位を持って行ってください。その部位が良くなりますよ」と説明があった。年配の親戚はジャンケンで足や杖を取り合っていた。受験生だった私は頭の部分を頂いた。弟は首を太くしたいと言って首の部分をもらった。

【仏壇】奈良県大和高田市の父親の実家に毎年お盆や正月の時期に帰るのだが、帰るとすぐに、先祖達の遺影が何枚も飾られた部屋にある仏壇に挨拶するように言われる（小さい頃は「まんまんちゃんしにいき！」と言われた）。仏壇前には紫の座布団1枚と木魚、おりん、小さい台みたいなものがあり、木魚は鳴らさず、おりんだけを鳴らして手を合わせ、帰ってきたことを報告する。少し面倒だったが、お供えのお菓子がいっぱい入った袋を貰えるので、別に苦ではなかった。

【両墓制】私の父方実家は、お墓参りの時、よく見かけるような石墓とは別に、竹林の中に木製の板を立ててあるお墓もお参りしていて、なぜ二種類あるのか不思議に思っていたが、講義で埋め墓と詣り墓のお話を聞き、その名残であったことを知った。思い返してみると竹林に入っていく道の始まりに、お地藏さんが祀られていた（奈良県大和郡山市）。

【お盆（栃木県）】私の母方の実家（栃木県芳賀郡芳賀町）では、迎え盆の昼間に野原に咲いている盆花・ほおずきを取りに行き、まこも・胡瓜や茄子で作った牛・馬を仏壇に飾る。そして日が暮れた頃、お墓まで、子供は絵柄の付いた提灯、大人は家紋入りの提灯に日を灯してご先祖様を迎えに行く。提灯で迎えるのは、ご先祖様が道に迷わない様に足元を照らすためだ。送り盆は、ご先祖様が三途の川を渡る際に乗り遅れない様に早目に送るという風習から、午前中の早い時間にお墓へ行く。その際、迎え盆で用意したまこも・牛・馬の飾りをまこもに包み、一緒にお墓へ持って行く。

【お盆（広島）】祖父母の地域では、8月のお盆過ぎ、菩提寺で灯籠流しというのがありました。広島の生口島と高根島に挟まれた瀬戸田水道で、引き潮にあわせて西向きに灯籠が流れて行きます。お盆に家に帰ってきた先祖を西方浄土に向けて送り出す意味があるそうです。コロナ禍以後、担い手の高齢化が理由となっていて行われなくなり、残念です。

【お盆（沖縄）】2025年9月、沖縄県豊見城市で旧盆を体験した。沖縄のお盆は旧暦に合わせて行われ、3日間（一部地域は4日間）にわたる。1日目はウンケー、2日目はナカビ、3日目はウークイと呼ばれる。ウンケーはご先祖様を迎える日。仏壇を整え、サトウキビ、果物、団子、お酒などを供える。サトウキビはご先祖様が家に帰ってくる際の杖の役割を果たす。県外のお盆とは異なり、ナスやキュウリは飾らない。ご先祖様と一緒についてきた無縁仏などがご先祖様に供えた食事を食べないように、お供え物や野菜の切れ端「ミンヌク」も供える。ウンケー・ジュシーを食べるのもこの日である。ウークイはご先祖様をお見送りする最終日である。三枚肉、紅白かまぼこ、昆布等を詰めた重箱料理を供える。お線香をあげ、ウートートー（仏壇に手を合わせること）するだけでなく、仏壇の前でウチカビと呼ばれるあの世のお金も焚く。

【韓国】韓国ではご先祖様の忌日に祭事を行う。祭事対象は主に直系の家族（親）とご先祖様たち。直系の家族の場合は忌日に、ご先祖様に対しては陰暦の1月1日（お正月）と8月15日（お盆）に行く。お正月やお盆には祖父母の兄弟をはじめ、その子供たち、孫まで多くの家族構成員たちが集まって、朝8時ごろに祭事を行う。卓の上には色んな食べ物が上がる。果物、餅、チヂミ、そしてタコや鮫みたいな高級の料理も上がる。子供の頃、私は積んでいるチヂミの山の一番下にあるカニカマで作ったチヂミをいつも引っ張り出していたので、祭事を行う前にチヂミの山を倒してしまうこともあった。また、私や兄や従兄弟は、何が面白かったのかいつも途中から笑いが止まらず、祖父に追い出されることもあった。

【併設葬儀場】祖父の葬式は、兵庫県宝塚市の介護老人ホームに併設された葬儀場で行われた。祖父は徳島市の出身、長年そこに暮らしていたが、家族の近くで過ごすため、数年前から老人ホームに入っていた。式の形式は一般的だったが、施設の中で葬儀から火葬までが完結する点に強い印象を受けた。合理的でありながらどこかシステムチック。葬儀に向かう途中、知らない入居者が手を合わせて祈っている姿を見て、ここでは「死」が生活の一部なのだと気づいた。

【散骨】2022年6月、曾祖父の散骨を行なった。曾祖父は鮮魚店を営んでおり、魚や海に愛着が強く、本人の希望で海洋散骨した。生前、祖母に「死んだら海に還って自由にしたい」と言っていたらしい。葬式、火葬が終わったら遺骨を散骨業者に渡し、その後は粉骨、散骨まで業者が行ってくれた。実際に散骨を行う現場には立ち会わなかったが、写真を業者が送ってくれた。愛知県知多市の海はとても綺麗で、曾祖父も気持ちよく最後を迎えられたと思う。

【看取り】私は母方の祖母が亡くなる際、ビデオ通話で看取るということをした。祖母は田舎の病院で介護を受けており、家族のほとんどが大阪に居たため危篤の報告があつてから向かうには遠すぎたのだ。学校から飛んで帰り、田舎に居た父がグループ通話で家族全員と繋いでくれたことで遠くからでも祖母の最期を見届けることができた。

【墓じまい】2014年7月、母方の祖母が亡くなり、お墓をどうするのかで両親が本当に悩んでいたのを、子供ながらに覚えている。某宗派のお寺にお墓を持っていたが、住職さんと不穏な関係になっていたため縁を切って、静岡県富士市の山奥にある、市が管轄している宗教を問わない墓園にお墓を買った。富士山が綺麗に見えるお墓だ。今時スタイルのお墓を買ったことで、いろいろなしがらみ（お金と寺付き合い）から解放されたように思われる。